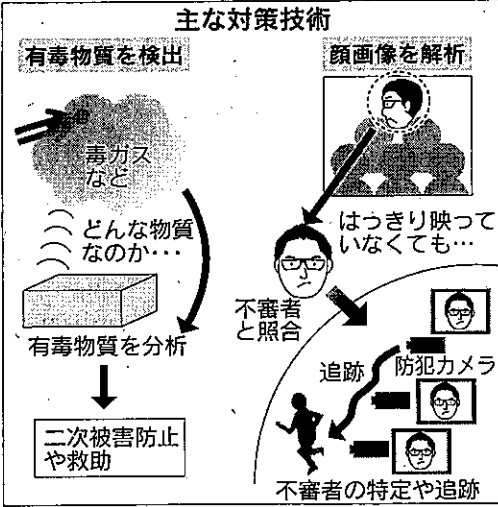


テロ対策、相次ぎ新技術

国内の企業や大学がテロ対策技術を相次いで開発している。オムロン子会社は防犯カメラに映った小さな横顔の画像から本人を特定する技術を確立し、不審者を追跡できるようにした。大阪大学や京都大学は毒ガスや核物質の検出装置を試作した。2020年に開く東京五輪に備えて、政府も技術開発を後押しする考え。日本が強みとする画像処理技術などを生かせるうえ、研究の成果は海外でも需要が見込めることから研究開発にも熱が入る。



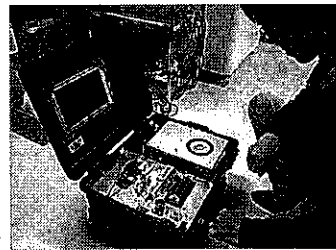
オムロン子会社のオムシヨンス(東京・港)な
ロソシアルソリユーどは、個人を見分けるの

オムロン子会社 横顔で本人特定 大阪 毒ガス検出早く

が難しい横顔の画像から本人を識別する技術を開発した。画像を正面向きに自動変換し、あらかじめ登録した人物や防犯カメラで見かけた不審者の顔画像と照合する。斜め40度の画像で識別成功率が約60%と実用水準に達した。

防犯カメラの片隅に映る小さな顔画像でも見極め、テロの防止や犯人追跡に役立つ。今年度にも実用化し警察などに売り込む。

大阪大の民谷栄一教授らは、毒ガスのサリンやVXガス、生物兵器の炭疽(たんそ)、菌を5〜15分以内に検出する装置を試作した。重さ25キロの



阪大が試作したサリンなどの検出装置は持ち運べる

箱形で消防署員らが現場へ運んで使う。各種の専用センサーを組み合わせて作った。まず炭疽菌向けには、微細な流路の内部で菌の遺伝

子を高速で増やして検出する技術を活用。ポツリ又ス毒素向けには、毒素が付くと色が変わる金の微粒子を使った。サリンなど向けには、毒ガスに触れると壊れる酵素を使い検出する技術を取り入れた。

事件現場で有毒物質を特定し、二次被害の防止や被害者の救助、住民避難に役立つ。企業と組んで軽量化し、16年度にも実用化する。

京大の大垣英明教授らはコンテナに隠された核兵器原料のウランを見つ

ける技術を開発した。放射線のガンマ線で照らし、1キロのウランを10分で見分ける。まず照射装置を試作した。港や空港で核物質を持ち込むのを防ぐ。

政府としても、犯罪やテロを防ぐ安全な社会づくりは大きな課題だ。このため研究開発の支援を通じて、爆薬などの成分を高精度に分析する技術や、軽くて身につけやすい化学防護服、隠し持った凶器を見破る画像技術などについても普及させたい考えだ。調査会社の

富士経済によると、画像処理などセキュリティ関連機器やサービスの国内市場規模は16年に6239億円と、12年に比べて9%増える見通し。